

へき地小規模校の体育授業におけるネット型の事例研究

高瀬 淳也
(鹿追町立上幌内小学校)

小出 高義
(北海道教育大学旭川校)

Case Study of the Net-Type in the Physical Education Class of the Rural Small School in Remote Area

Junya Takase

Takayoshi Koide

概要

本実践報告は、へき地小規模校における体育授業で、ボール運動などの集団スポーツをどのように扱う事が望ましいのか、その可能性について授業実践から明らかにする。へき地小規模校のネット型授業において、連携プレイの可能性を引き出すような授業内容を考案し、授業実践の中からその有効性を検討することによって、今後のへき地小規模校における集団スポーツにおける一資料を提示する。

1 はじめに

平成25年度北海道学校一覧(北海道教育委員会, 2014)によると、北海道には1147校の公立小学校があるが、その中で公立へき地等指定学校(以降、へき地小規模校)は441校と約半分を占めている。また、へき地小規模校の多くは2学年が一つの学級を構成する複式学級であり、学級児童数が5名以下になることも珍しいことではない。このことから、北海道におけるへき地教育は、非常に重要であると考えられる。

全国へき地研究連盟(1998)は、少人数学級の問題点として、人間関係が固定化されやすいため「多様な発想や思考の交流が不足し、集団思考を通じて思考の深化が期待しにくく」いこと、「児童は教師依存になりやすく、児童の中で低迷する雰囲気を作りやすい」ことをあげている。また、「少人数学級では授業中の話し合い活動における意見そのものが少なくなる傾向にあり、授業内容の広がりや理解・思考の深まりが生まれにくく、他者からの視点をもとに自分の考えを発展させる場面を作り出すことが難しい。」(高瀬ら, 2014)という指摘もある。このようなことから、へき地小規模校では、互いに意見を出し合いながら思考を深めたり、教え合いながら知識や技能を習得したりする協働的な学習が生まれにくい状況にあると言える。

特に、仲間と関わり合いながら学習を進めていくことが多い体育授業は、他教科に比べ課題が多く見られる。「少人数のために指導しにくい運動種目としては、集団スポーツとしてのゲームやボール運動」(立木, 1992)、「小規模校でボール運動領域の学習指導は困難である」と指摘する教員は多い(織奥, 1993)という報告があるように、体育授業の中でも、集団で行うゲームやボール運動領域では、少人数がデメリットとなることが多い。このため、全

校合同で体育授業を行ったり、近隣の小規模校が集まる「集合学習」の中で集団ゲームを取り入れたりするなど、学習集団を大きくする試みに取り組む学校も多い。しかし、全校合同の体育授業では、1～6年生が一緒に学習するため、単式学級に比べ運動経験、技能差、体格・体力差が大きく、特に下学年の児童にかかる負担は大きい。また集合学習では、年に数回程度しか実施できず、日常の体育授業に取り入れることは難しい。このようなことから、へき地小規模校において集団スポーツの学習をどのように展開していくか、大きな課題である。

ところで、現行の学習指導要領では「種目主義を克服して、球技を楽しむための共通した戦術の能力を育成する必要があると考えられ」(高橋, 2010)、戦術やルールの観点から「ネット型」「ゴール型」「ベースボール型」に分類された。このことによって、既存の種目にとらわれることなく、「戦術的課題」がとらえやすいように「誇張されたゲーム」や、発達段階に適するように「修正されたゲーム」を行えるようになった。鎌田ら(2005)は、「連携プレイ」の意図的な達成や、連携プレイ型のゲーム戦術的行動を易しく学習できる教材として、3対3の「アタック・プレルボール」を行い、意図的なセットプレイの実現性が50%前後まで高まったと報告している。このような戦術学習を軸とした実践研究の報告が増えてきているが、多くは単式学級による実践であり、へき地小規模校における実践研究はほとんど見られない。

そこで本稿では、へき地小規模校の高学年学級において、連携プレイの可能性を引き出すような授業内容を考案し、授業実践の中からその有効性について検討することとした。ボール運動領域の中でバレーボールを代表とするネット型は、ワウバウンドやキャッチなどボール操作を簡易化によって、連携プレイの実現可能性を高めることがで

きることから、ここに取り上げることにした。

2 授業実践の条件

2.1 期日・対象

2014年2月下旬から3月上旬にかけて、北海道S町立K小学校の五年生男子2名と六年生男子1名の複式学級におけるボール運動のネット型を調査対象とした。

2.2 単元・教材

今回の実践では、学習指導要領解説体育編のボール運動で示された内容のうち、「緩和したボールがつながりやすい状況のなかで、相手が捕りにくいようなボールを打ち返すことができる」(文部科学省, 2008)ことを目指し、「意図したセットによる攻撃ができる」(鎌田ら, 2005)ように単元構成やゲームを設定した。ゲームは、鎌田ら(2005)や中村ら(2006)の攻撃・プレルボールの実践を参考に、学級3名でもできるように修正し、全5時間を構成した。

本単元では、意図したセットによる攻撃ができること、攻撃側の児童がセッターを含め2名しかいないことを考慮し、セッターとアタッカー間での連携プレイに重点を置いて授業を進めた。

■ゲームサイズ

2対2 (セッターは両チーム共通)

■コート

ネットを中央にして、縦5m横4mのコートを使用

■ネット

バドミントンの支柱及びネットを使い、高さを155cmとした。ただしネット部分は巻き付けて、ネット下をセッターが通過しやすいようにした(写真1)。



写真1 コート全体とネット部分を巻き付けた様子

■ボール

SV4-YBLスマイルバレー4号 (Mikasa社製)

■ゲーム中の主要なルール

ボール操作:必ず3回(レシーブ, トス, アタック)の触球で相手コートに返す。その際、レシーブ, トスはキャッチしてから投げることができるが、アタックのキャッチは認めない。トス・アタック間以外は、ワンバウンドまでを認めることとした。

得点:相手コートからの返球をワンバウンド以内にキャッチできなかったら得点。また、相手コートへの返球が、ラインの外側に直接落下した場合はアウトとし、相手チームの得点とした。セッターの児童は得点が入らない。得点は個別に加算され、「3対2対1」と表示する。

特別ルール:セッターは両チーム共通とする。セッターは、トスした後、ネットの下をくぐって移動し、反対側のチームのトスに備える。これを繰り返す。セッターが触球後、ボールが落下した場合はやり直しとする。ゲームするコートは、得点が決まるたびに替わる。Aコートでプレイ→セッター→Bコートでプレイ→Aコートでプレイ…を繰り返す(図1を参照)。サーブは行わず、Aコートにいる児童が、セッターにトスを上げてゲームを開始する。

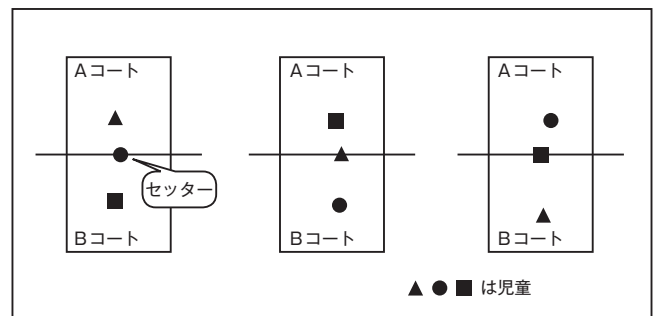


図1 ゲームコートのローテーションの仕方

2.3 分析方法

本実践では、授業全体を撮影したビデオ映像による児童の活動記録・観察、児童の学習カードの内容、高橋ら(2003)によって作成された形成的授業評価により検討を加えることで、その有効性を分析した。

3 授業実践の結果

3.1 第1時間目

本単元の流れについて説明した後、アタックの練習をした。児童3名は、ボールを打つ位置が低く、手のひら全体でボールを打つことができていなかった。そこで、頭上に投げ上げたボールを、肘を伸ばし高い位置で打つことを意識させて練習した。

その後、ゲームについて説明をし、実際に行った。はじめは、レシーブ、トスはワンバウンドさせるルールだったが、何度か練習していくうちに「レシーブトス間は、ワンバウンドしない方が、スピード感があっておもしろい」と意見が出た。そこで「ワンバウンドしてもよい」という

ルールに変更した。

ゲームでは、セッターがネット下をくぐって両コートを往復する。その点については、セッターがトスを上げる動きに大きな支障は認められず、児童からも「大丈夫です」という言葉が返ってきた。

この時間のゲームでは、相手コートへの返球の際、両手でボールを打ったり、山なりのボールを返球したりなどの動きが多く、強いアタックはほとんど見られなかった。

3.2 第2時間目

この時間は、トス・アタックのセットプレイについて学習した。児童3名とも右利きのため、セッターになった児童は、ネット近くの中央に立ち、レフト方向を向いてトスすることを基本とした。そして、レフト方向へ低めのトスを上げる「A」、レフト方向へ高めのトスを上げる「B」、セッターがライト方向に向きを変え高めのトスを上げる「C」の三種類を設定し練習した。練習では、トスが低すぎたり高すぎたりしたため、授業者が手本を見せたり、トスの高さについて助言をした（写真2・3・4）。



写真2 レフト方向へ低めのトスを上げる「A」



写真3 レフト方向へ高めのトスを上げる「B」



写真4 ライト方向に高めのトスを上げる「C」

そこで、一度集合をさせ「ゲーム中、セッターに『A・B・C』をどう伝えるといい?」と質問した。「声をかける」という意見が出てきたが、「相手にも聞こえてしまって、守りやすい状況になる」という反論が出た。そこで、最初のアタックについては、プレイ前にセッターが両コートに行き、「どのトスを上げるか」を確認する時間を設けることとした。また、2回目以降のアタックは、アタックを打つ児童がその都度、口頭で指示するようにした（写真5）。話し合い後の練習では、セッターとアタッカー間の連携プレイが成功するようになった。しかし、ゲームでは、トスが安定せず、アタックがネットを越えなかったり大きすぎたりすることも見られたが、意図的に組み立てられた攻撃ができるようになった。



写真5 ゲーム前にトスについて打ち合わせる様子

3.3 第3時間目

この時間はアタックを打つコースについての学習をした。この日、学級の朝の会の時に「体育の時間、(前時で)アタックがアウトになることが多かったので気をつけた」という話が出ていた。そこで授業の導入部で、「アタックがアウトにならないようにするにはどうしたらいい?」と発問した。児童からは、「フェイントする」という答えがあったが、他には出てこなかった。そこで、「打つ強さは変えずに、(打つ)方向を工夫できないかな」と投げかけ、「アウトにならないように、遠くの端の方(クロス方向)をねらってみよう」と課題を設定して練習を行った。練習では、コート端に目印の箱を置き、それをねらって打つよ

うにした。また、助走の方向も、ネットに対して左斜め方向から走るとよいことも確認して行った。

アタックは、「肘を伸ばし高い位置で打つこと」「手首を返す」ことが身に付き、コート内にボールを打つことができるようになってきた。児童の学習カードには、「左の方向から右に投げる（アタックする）ことで、ボールの行く距離が長くなり、（打つ）加減が楽になった」と書いていた。この児童は、前時までフェイントを多用していたが、打つ方向を意識するようになってから、力強いアタックを打って得点をねらうようになった。

3.4 第4時間目

この時間は、攻撃する二人の連携プレイの成功率をさらに高められることを目指した。そこで授業の前半は、アタック練習を中心に行い、アタックを打つ度、セッターに「もう少し高めに」「今のは、ちょうどいい」などの声をかけさせた。このことによって、アタックを打つ相手によってトスの高さを調整することができ、学習カードにも「今日は、セッターのトスの投げる高さを考えて（中略）2人がどの高さが打ちやすいかわかった」と書かれていた。

授業の最後にゲームをしたが、トスが安定し連携プレイが成功するようになったこと、アタックを打つ技能が高まったことから、ラリーが続かなくなっていた。そこで、縦30cm、横60cm、高さ90cmの直方体の箱を準備し、コート後方の好きなところに設置させた（写真6）。そしてこの箱に相手のアタックしたボールが当たった場合は、「レシーブをした」と見なすことにした。これにより、箱の置き方と自分の守備位置の関係を考えることもでき、ラリーが続くようになった。また、トスの高さを調整したことによって、バレーボールの速攻攻撃のような低いトスからアタックする場面が多く見られた。



写真6 直方体の箱を設置する様子

3.5 第5時間目

この時間は、単元のまとめとしてゲーム大会を行った。ゲーム前のアタック練習では、セッターに「A！」などと声をかけ、連携プレイを意識している様子が見られた。ゲームは、前半と後半の2回行い、その間に学習カードでゲーム中に考えたことや作戦を書かせた。ゲーム中、トス

は安定しており、アタックも方向を打ち分ける様子が見られた。授業後に書いた学習カードには、「強く打つことで、相手が捕りづらいボールを打つことができた」とアタックを強く打つことや、「Cの作戦は、真横に打つような感じにする」「アタックの時、ななめに打って見たら、点がいっぱいとることができて（以降、省略）」など打つ方向を工夫することで点数につながったということが書かれていた（図2）。

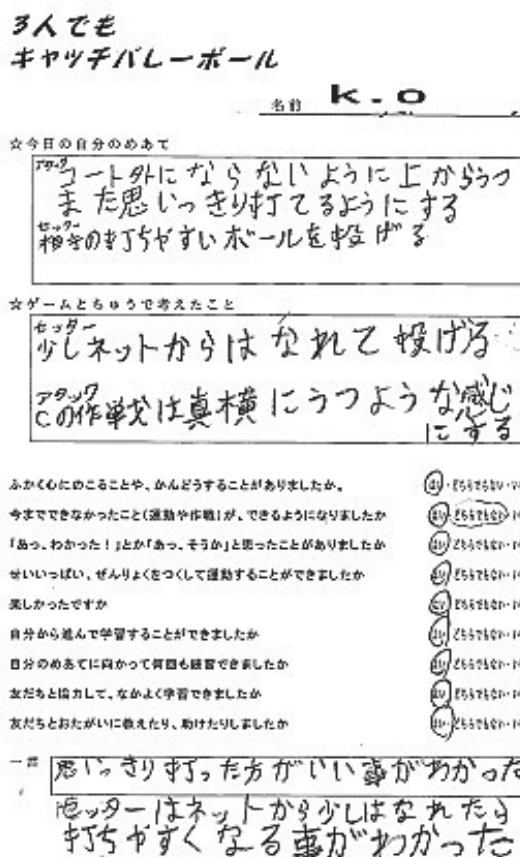


図2 児童の学習カード

3.6 形成的授業評価

授業ごとの形成的授業評価を行った。それぞれの項目は「はい（3点）」「どちらでもない（2点）」「いいえ（1点）」で回答させた。9つの質問項目を「成果」「意欲関心」「学び方」「協力」の4次元に分け、時間ごとに平均を算出したところ、以下ようになった（表1・2・3）。

表1 Y.Yの結果

	1時	2時	3時	4時	5時	全体
成果	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
意欲関心	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
学び方	2.5	2.5	3.0	3.0	3.0	2.8
協力	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0

表2 R.Kの結果

	1時	2時	3時	4時	5時	全体
成果	2.67	3.0	3.0	3.0	3.0	2.93
意欲関心	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
学び方	2.5	3.0	3.0	3.0	3.0	2.9
協力	2.5	2.5	3.0	3.0	3.0	2.8

表2 K.Oの結果

	1時	2時	3時	4時	5時	全体
成果	2.67	3.0	3.0	3.0	3.0	2.93
意欲関心	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	3.0
学び方	2.5	2.5	3.0	3.0	3.0	2.9
協力	2.5	2.5	3.0	3.0	3.0	2.8

1時間目は、ルール設定や準備運動の仕方など、マネジメント的な時間が多かったため、点数が低いと考えられる。その後の授業ではアタック技能の習得にともない、得点が高くなっていった。

4 考察と今後の課題

本稿では、へき地小規模校におけるネット型ゲームの有効性について検討した。本実践では、トス-アタック間の連携したプレイができるよう、トスを3種類設定した。

そして、プレイ前にトスの位置を確認したり、ラリーが続いたときにはアタックを打つ児童がセッターに口頭で指示したりするようにした。その結果、アタックを打つ児童が、相手の立ち位置を見てトスを選択してセッターに伝え、その指示通りにセッターがトスをする「意図的なセット」ができるようになった。

5時間目のゲームにおいてセッターのトスした位置を調べると、レフト方向へ低めのトスを上げる「A」が43%、レフト方向へ高めのトスを上げる「B」が31%、ライト方向への高めのトスを上げる「C」が25%であった。3人とも右利きであることからレフトからのアタックが多いが、アタックで相手コート内に返球できた割合は、ゲーム全体で83%と高確率であった。このことから、トスとアタック間で連携プレイが成立していたと考えられる。

また、3人でもネット型ゲームができるよう、コート of 広さやセッターを共有するなど工夫をした。形成的授業評価を見ると、意欲・関心の次元、協力の単元ともに、単元を通して3人の平均2.93と高い値であり、児童が意欲的に、協力して学習に取り組むことができたと考えられる。

さらに、一人一つのボールを使って練習をしたり、授業の中でトス-アタック間の練習時間を確保したりするなど、少人数のよさを授業に生かすことができたと考える。

これらのことから、本教材では「意図的なセットによる攻撃」がゲーム中に行われ、また仲間との連携を意識させ

ることができたといえ、本実践が3名のネット型の教材として有効であったと考えられる。さらに、本実践で習得した技能や戦術を基礎として、中学校入学後のネット型の授業では、チームメイトと連携しながらより高度な攻撃の習得につながることを期待される。

ネット型は本実践のような連携プレイ型だけではなく、卓球やテニスのように1対1で行う攻守一体型の実践も報告されている(今井, 2013)。今後は、テニスのようなラケットスポーツの授業づくりを研究することで、さらに少人数を生かした授業実践ができることも考えられる。今後の課題としたい。最後に、本稿を足がかりに少人数における集団スポーツを教材とした授業実践報告が多くなり、今後のへき地における体育学習の発展に結びつくことを期待したい。

【参考・引用文献】

- 浅井正仁 (2012) バレーボール, 高橋健夫・品田龍吉・小澤治夫・友添秀則編著, ステップアップ中学体育.大 修館書店:東京, pp.170-pp.189
- 北海道教育委員会 平成25年度北海道学校一覧について <http://www.dokyoai.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ksk/chosa/gakkou-i/2013gakkou-i.htm> (参照日2014年12月12日)
- 今井茂樹 (2013) 小学校に攻守一体タイプのネット型ゲームを-個が輝くショートテニス&テニピンの教材創り.体育科教育第61巻5号.大修館書店:東京, pp.28-pp.32
- 岩田靖 (2012) 体育教材を創る-運動の面白さに誘い込む授業づくりを求めて.大修館書店:東京
- 鎌田望・齊藤和久・岩田靖・北村久美 (2005) 小学校体育におけるネット型ゲームの教材づくりに関する検討-「連携プレイ」の実現可能性から見たアタック・プレルボールの分析-.信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』.No.6:111-120
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領.東洋館出版:東京.
- 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説体育編.東洋館出版:東京
- 中村恭之・岩田靖・吉田直晃 (2006) 中学校体育におけるネット型ゲームの授業研究-「連携プレイ」の役割行動を誇張するアタック・プレルボールの検討-.信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』.No.7:1-10
- 織奥信男 (1993) 小学校の小規模校における体育授業に関する研究 極小規模校の教科体育経営について.体育・スポーツ経営学研究, 10 (1):57-72
- 総務省統計局 第六十三回 日本統計年鑑 平成26年.第22章教育.22-3都道府県別小学校<http://www.stat.go.jp/data/nenkan/zuhyou/y2203000.xls> (参照日2014年3月28日)
- 高橋健夫編著 (2003), 体育授業を観察評価する-授業改善

のためのオーセンティック・アセスメント.明和出版：
東京, pp.12-pp.15

高橋健夫 (2010), 学習指導要領改訂の基本方針と体育
授業.中学校保健体育科ニュース2010年No.1.大修館書
店：東京,pp2-8

高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖編著 (2010) 新版
体育科教育学入門.大修館書店：東京

高瀬淳也・森田憲輝・中島寿宏 (2014) 「へき地小規模小
学校におけるベースボール型授業の事例研究」, 北海
道体育学研究49：13-19

立木正 (1992) 東京都区内の小規模学校における小学校体
育の現状と課題.東京学芸大学紀要5部門, 44：149-157

全国へき地研究連盟編 (1998) 学習指導方法の工夫・改善
～へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例
～.：東京, pp.23-24